

# 東日本大震災復興支援プロジェクト

## 第2回 いのちネットボランティア7・27~29

# おとな新聞

発行

2012年10月30日

# 忘れない



復興支援ふれ愛ライブ 穂穂えいな  
(歌手) セヶ浜仮設住宅・海まつり

我らはコウノトリ

T

豊岡のコウノトリは全国各地に出かけた多くの人々に感動や希望を与えた。一度訪れた場所は忘れず、何度でも訪れることができる。私たちも東北のことを忘れない。昨年仮設住宅での「また来るからね」の約束を果たすことができた。中高生を含め倍近いメンバーの増加と市役所の支援は、今回の大きな成果であり、希望である。豊岡から東北への道は去年よりたく近くなったような気がする。コウノトリの第3世代の巣立ちのように、忘れず続けるエネルギーは明日の豊岡をつくることにつながるかと確信している。

絆

Y

「いろんな人に支えられて、生かされているので、一日一日を大切にかんしゃしながら過ごしている。いっどこで同じことが起こるか分からない。人と人との絆が一番大切だと思う。」と、女性が話しかけてくださった。とても大切なメッセージをいただけたと思うので、この言葉に胸にこれからの生活を考え、できることを見つけていきたい。

ふるさとの意味

Y

去年5月に気仙沼に2日間行った時は家の泥のかき出し、片付けでした。今回車椅子の男性と話をさせてもらった。家族は全員無事だったけれど息子さんは4日間会えなかったそうだ。仕事の関係

で孫さんたちは青森で暮らされるようになられたとか。ふるさとの意味が重く重く胸にこたえた。現地では津波のごみは山になっていて、去年あれだけ絆、絆と言っていたのに、なぜ地方は震災のごみを引き受けてくれないのだろうか。

息子に背中を押され

O

中学生の息子に背中を押され参加した。得るものがたくさんあった。家庭や職場で相手の立場で物事を考え、行動することを忘れずにいたい。人に笑顔や元気を与えるには自分自身がまず健康で心に余裕がないと難しいことだと実感した。また参加させていただきたい。

人間の強さと優しさ

A

準備が終わり、ライブ、出店が始まった。子どもさんや高齢者の方が集まってくたさる。何と話しかけていいのか戸惑った。そんな私を前に被災者は「何でも聞いて」「遠くから来てくれてありがとう」と言ってくたさる。自分の情けなさを痛感しつつ、迷いが吹っ切れた。とにかく話を聞き、笑顔でいようと切り替えた。被災者は様々な想いを抱えながらも何度も何度も「ありがとう」と言ってくたさった。たくさんの痛みを抱え、それでも感謝の気持ちを持ち続け、微笑み、人間の強さや優しさを教えていただいた。忘れず一緒に考え続けることが支援の一つだと思ふ。

## 来年も参加したい

T

私は震災直後に仕事で被災地支援に行き、壮絶な状況を目の当たりした。震災後1年4ヶ月が経ち、街は見違えるほどきれいになり、仮設住宅の暮らしも一見穏やかにさえ感じられた。しかし、コンサート終了間近になり、「去年出会えてよかった。来年も会えますか。きっと会えますよね。」と何人かの女性は穂穂さんの手をなかなか離されようとはしなかった。この光景を見て、震災で失ったもの大きさ、傷の深さとともに、少しずつ気持ちを取り戻されてきていることを感じた。私も元気で暮らしていますよとメッセージをもって、来年もぜひ参加したい。

## 印象的な場面

M

出店で恥ずかしそうにしていた女の子は時間が経つにつれ、ボランティアの生徒とからかいながら遊んでいた。まるでクラスの男女のように。この光景が「来たかいたがあった」と思えた瞬間だった。また訪問し、「また来てくれたのか」と喜んでもらうことが大事だと思う。被災地のテレビを見ながらモヤモヤしていた気持ちが解消できたので、有意義な参加になった。

## バルーンアート

I

子どもたちがプレーしているサッカー場の後ろに巨大な瓦礫の要塞があった。初めて「被災地の現実」を実感し、相当

なショックだった。仮設住宅でのバルーンアートでは年配の方にも喜んでもらえる。バルーン作品は数時間でつやがなくなり、数日ではぼんぼんしてしまうさみしいものだ。しかし、バルーンの思い出はみんなの心いつまでも輝き、夢と希望を増やせるすばらしいツールだと思う。



## ボランティアに参加して

K

「自分は助かったけれど、あの時津波と一緒に流された方がよかったのではと思う。」と話された方の心の重さ。その方が、やっぱり生きていてよかった！！と思う日があるまでかかわり続けよう、そう決心した。

## 思いやりの心

H

私たちが行動した日の東北は、この夏一番の猛暑だった。そんな中、中学生高校生たちは、誰に強制されるでもなく、自ら、仮設住宅に住む被災者の方々に、『ふれあいライブに来て下さい』と呼びかけまわった。そばで聞いていて、一人

でも多くの方に、楽しんで欲しい、喜んでほしいと言う熱い『心の叫び』に聞こえた。人への思いやりの心の尊さを改めて感じる光景だった。今後も、一人でも多くの子どもから大人までが、この『思いやりの心』で、被災者の皆様のために接していく活動をして行かねばと感じた。

## 復興と成長

T

自分の中で考えている『ボランティア』とは、力仕事、着ているものは汚れ、汗をかき、ヘトヘトになって、そんなイメージを持っていた。この会に参加して『ボランティア』ってそれだけじゃない、ある程度時が過ぎれば、こういった形のボランティアもあるのが少しずつ分かってきたような気がする。復興支援のボランティアに参加している側だが同時に自分も成長させてもらっている。復興も成長も続けるのが大切なのだろう。



## 中高生に乾杯

Y

帰りのバスの中で、高校2年生らが司

会し、「これから何をなすべきか」を真剣に議論していた。子ども新聞を作ろう、報告会をしよう、街頭で新聞を配ろう、生徒会や文化祭で発表しよう、募金活動をしよう・・・その後、生徒らは次々とそれらを行動に移していった。若いことはすごいことだ。



今号は、支援の様子を伝える「子ども新聞」の大人版です。

ボランティアは、仮設住宅での各種屋台の出店、穂穂えりなライブ、今西強バルーンアートの開催、被災者との交流などを行いました。学都仙台コンソーシアム、豊岡市、七ヶ浜ボランティアセンター、野菜提供の農家、その他多くの市民の皆様にはご協力、ご支援を賜り、深く感謝申し上げます。

## 発行

コウノトリ豊岡・いのちのネットワーク

協議会（おとな新聞編集会議）

TEL 0796・26・1101